

2021. 7. 25. 主日礼拝説教

聖書：申命記8章11-20節

『喜びは苦しみの中から』

みなさんは天国と極楽の違いはおわかりでしょうか。天国はキリスト教でいう来世で、極楽は仏教でいう来世で、どちらも中身は同じとお考えの方はおられません。しかし、極楽のことはさておき、天国とは中身がまったく逆なのです。

天国といえば旧約聖書の創世記2章に登場するエデンの園を連想しますが、エデンとはシュメール・アッカド語で「荒地」を意味します。創世記2章15節に「主なる神は人を連れてきて、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた」とありますが、これは天国とは荒地ということ、人が荒地を耕して生きる処に神の支配というものがあるのだということを表しています。つまり神は人を汗を流して働くように創られたということなのです。

わたしたちは、天国というと何の悩みもなく、働かなくても楽しく遊んで暮らせる何不自由ない生活というイメージを抱きがちですが、実はまったく逆で荒地なのです。しかし、その汗を流す荒地の開墾生活の中に神の働きかけがあるのだと聖書は語りかけて来るのです。

神の求められる生き方は、このように額に汗して荒地を耕すようなことであって、決して耕したものをため込んだりして自分勝手に独り占めすることでもなく(ルカ12;13-21)、ましてや汗もかかずに富を所有することでもありません。たとえ、富をえられなくても、荒地を開墾してゆくような過程(プロセス)を神は大切にされるのではないのでしょうか。

申命記8章11～20節には、所有するようになると高ぶり、神を忘れ、罪を犯すようになると語られます。そして、そのことがわかっているからわたしはあなたがたを荒地に導き出し、何もない処で養ったのだということを神が言われたと記されています。

わたしたちは喜びと快楽をまぜこぜにしてしまいます。喜びと快楽の違いは、喜びには常に愛と感謝と祈りが伴い、快楽には自分の欲望を満たした達成感しか伴わないことです。成功して富や名誉を所有すればするほど他人との間に溝が出来たり、塀が出来て孤立してゆくとなれば、それは快楽であったしるしです。そこには達成感と引き替えに他者を受け入れられないひとりよがりな自己主張しか残りません。

しかし、福音にあずかる喜びには、たとえ苦しみの中にあっても他者の支えを感じたり、自分の苦勞が誰かの役に立っていると感じるところから生まれてきます。難しい問題であればあるほど意味を見出して喜びが輝き出してくるものです。

所有することと快楽は常に結びつき、活用することと喜びは常に結びつきます。今の自分の力を活用して愛する人々のために耕す生き方をしようとする時に神の創造の目的にかなった生き方が生まれてくるのです。

「荒野を通る」ことに神が意味を置かれたように、わたしたちは人生を旅人のように通ってゆくものです。妄想でしかない素晴らしい目的地を夢見るより、現実の過程に意味を置くならば、荒地である天国を求めることが、どんなに慰めに満ち、創造的で、能動的な生き方になるかを考えたいと思うのです。苦しみやぼやき、憎しみや後悔の続く生活から感謝と喜びに満たされた生き方へと強く変えられてゆきたいと願うのです。